

国際コミュニケーション学科・海外留学が持たらす効果の検証

Measuring the Effect of Study Abroad Programs on the Global Communication Department

牟田 美信

1. はじめに

日本人の海外留学者数は、2004 年をピークに減少しているが、独立行政法人日本学生支援機構の調査によると、「大学等が把握している日本人学生の海外留学状況については、短期の留学を中心に留学生数が増加傾向にあり、平成 26 年度（2014 年度）は 81,219 人（対前年度比 11,350 人増）」とある。また「近年は学位取得等を目的としない短期の留学が先進国等において増加傾向にあり、日本人の海外留学についても同様の傾向が見られる。」と報告されている。

本学国際コミュニケーション学科においても、短期・中期・長期の留学を長年実施してきた。これまで多くの学生が留学し、語学を学び、異文化を体験できる学科の留学プログラムは、グローバル人材育成の一翼を担っているものとする。ここでは特に休学期間を利用し、海外での長期有給インターンシップ留学の状況を取り上げ、留学がもたらす効果を検証するものである。

近年海外への留学者数が多少増加した一つの理由としては、文部科学省が 2020 年東京オリンピックをゴールとした、小中高での英語教育の強化や 2014 年からスタートした、官民協働で取り組んでいる「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」海外留学支援制度の効果などがあるのではないだろうか。このプログラムでは、「2020 年までの 7 年間で約 1 万人の高校生、大学生を派遣留学生として海外に送り出す」計画である。また「派遣留学生は支援企業と共にグローバル人材コミュニティを形成し“産業界を中心に社会で求められる人材”、“世界で、又は世界を視野に入れて活躍できる人材”へと育成する。」としている。

2. 国際コミュニケーション学科の平成 27 年度の留学状況

2015 年度は、以下のような留学状況（留学先・期間・派遣人数）となっており、毎年、留学者数は少しずつ増えている。

- ・3 ヶ月カナダ留学（University of Victoria） 14 名
- ・3 ヶ月韓国留学（梨花女子大学） 7 名
- ・3 ヶ月イギリス留学（Chichester College） 4 名
- ・6 ヶ月イギリス交換留学（Guilford College） 1 名
- ・短期韓国釜山女子研修（釜山女子大学） 5 名
- ・1 年ニュージーランド有給インターンシップ（休学） 4 名
- ・1 年スイスオペアプログラム（休学） 1 名
- ・1 年フィジー語学プログラム（休学） 1 名
- ・1 年オーストラリア語学留学（休学） 1 名

3. ニュージーランド有給インターンシップ留学（語学＋有給インターンシップ）

平成 28 年 2 月 29 日（月）～3 月 6 日（月）でニュージーランドの語学学校 4 校を訪問し、教育内容視察。同時に、有給インターンシップ（ホテル）に参加している学生を訪問し状況の調査を行った。

1) ～ 4) に語学学校、5) にインターンシップの状況を記載する。

1) New Zealand Language Centres <http://www.newzealandlifetours.com/nzlc-new-zealand-language-centres>

同じ建物にある、フード関係の専門学校とも連携してバリスタのコースも提供している。ロケーションもハーバー沿いで静かな環境であり、教室等も多く様々な国からの留学生が学んでいる。優良な英語スクールであり、IELTSなどの得点の向上に熱心に取り組んでおり、かなりの成果を上げている。教員の質を高めるために、英語教育の研究所も設けており、世界中のティーチングに関する情報を集め、自分たちの教育に反映させている。



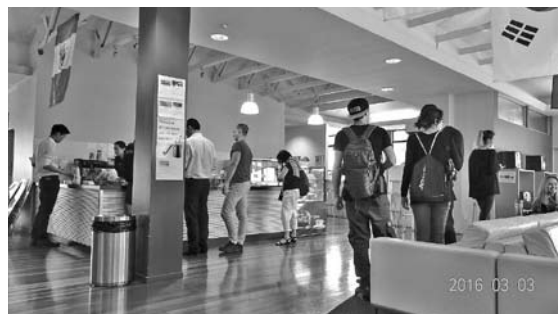
2) Ntec Concordia English - NTEC Tertiary Group <http://www.newzealandlifetours.com/ntec>

13 カ国担当のマーケティングマネージャーがおり、世界中から学生を募集している。日本人は、今は13人程度である。大学へのトランスファーやビジネス英語、IELTSに力を入れており、優秀な先生を揃えている。NZQA（日本の文部省的な機関）より category1 の優秀な学校と認定されている。バリスタコース（NZQA が認定している国家資格に近い資格）も人気で、オークランドで2校のうちの1校である。このバリスタコース（ervicIQ）は、約\$550 ほど授業料が必要となる。



3) Worldwide School of English <http://www.WorldwideSchoolofEnglish.com>

教員と学生距離が近く、面倒見のよいアットホーム的な雰囲気がある学校である。この学校も同ビル内の専門学校と建物をシェアをしており、受講人数が少ない場合、合同で授業を実施し、効率的に学校運営を行っている。英語が十分でない保育の学生も、保育関係の仕事でインターンシップが可能である。また、客室乗務員養成のコースも人気で、日本からの参加者も増えている。学生の5-7割程は、地元ニュージーランド人であることから、とてもいい勉強になるとのこと。CAになる比率も7割程度と高いとのこと。



4) Taylors College <http://www.afy.ac.nz/about/campus>

Embassy という英語学校と、Taylors College という4年生大学への入学のための準備校となっている。英語学校は、General English から IELTS までの英語を教えている。Taylors College では、英語に加えて、数学、化学、美術など4年生大学に入学した時に必要とされる専門の学習をしている。アジアの学生、特に中国、インド、韓国の学生が多く、このほとんどが大学へ進学するとのこと。ニュージーランドの大学は、全て国立で、大変授業が難しいとのこと。



Embassy English スクールはよく知られており、世界的に系列の英語スクールを持っている。また、ここで使用されているテキスト（face2face）は、日本でもよく使用されているものである。

5) インターンシップ先訪問

5.1) 受入先: Novotel Queenstown 1名

学生の直属のマネージャーと会って話を聞くことができ、「このインターンシップ生は、仕事ぶりも非常に丁寧で、真面目だ」と話してくれた。また、学生のコメントは次のようになっている。「多国籍の人たちと英語を共通語として仕事することで、自分の成長を実感できている」、「クイーンズタウン中心街にあるこのホテルは、全ての季節で多くのお客さんが利用する」、「ベットメイキングをチリ出身の学生と共にペアを組んで作業にあたっている」「30 カ国以上の人（学生）がホテルで働いている」。



5.2) 受入先: Kingsgate Hotel Te Anau 2名

二人のホストと同時に、インターンシップ先のフロントマネージャーである担当者に会って話を聞くことができた。

二人は、非常に仕事熱心で、丁寧な仕事ぶりで、可能なら、もう一年働いてもらいたいと非常に評価が高かった。二人が働いている街は、地方で、湖のほとりにある、リゾート地である。日本人客も少なく、英語を学習するには、とても素晴らしい環境であった。現在、ハイシーズンで仕事は忙しいが、英語を使っている仕事に満足しており、充実した生活を送っているとのこと。上司がインド人であったり、同僚が様々な国の出身者であることから仕事上での異文化を感じながら様々な体験をしているとのこと。



4. 学生の声

今回訪問した3人は、Wellingtonにある同じCampbell Institute（語学学校）で2～3ヶ月（個人の英語レベルによる）語学の勉強をした後、それぞれのホテルでインターンシップに取り組んでいる。3人の学生に、次のような観点から、留学に関してレポートしてもらった。「英語学校に通っていた時に感じたこと、学んだこと、気づいたこと、良かったと思う事」、「インターンシップの時に感じていること、学んだこと、気づいたこと、良かったと思う事」、「ニュージーランドでの異文化との接触で感じること」「これから、又は将来やってみないと、今思っていること」。

（Wさん）

－語学学校に通っている時に感じたこと

最初は学校の仕組みや現地の人の話すスピードに慣れるまで大変でしたが、友達ができてからは毎日楽しく学校に通っていました。Campbellにはいろいろな国から学生が来ていてお互いの国の文化を交流を通して知ることができました。しかし、わたしたちのクラスは日本人が多かったので最初は日本語を使うことが多かったのですが、慣れてからは英語で会話するように心がけていました。授業は午前中が文法、午後は conversation のクラスで私は話すのが苦手だったので午後のクラスが難しくて大変でした。しかし、語学学校を卒業する頃は授業にも慣れて楽しく授業に参加していました。語学学校でできた友達とは、今も連絡をとりあっています。

－インターンシップで感じること

私は Novotel Queenstown Lakeside で働いています。部屋は全部で 273 部屋あり、毎日平均 130 ～ 140 部屋フルクリーニングで毎日 20 人前後のスタッフでペアを組んで掃除しています。毎日 1 ペアだいたい 1 フロア（20 ～ 25 部屋）掃除します。最初の一週間は kiwi のトレーナーさんにトレーニングしてもらいました。トレーニング後は普通にスタッフとして扱われるのですが最初は慣れない仕事に体力的にも精神的にも辛かったです。が、慣れてきた今は早く終わらせられるようになりました。1 フロアを 1 人で任せてもらえるようになり、毎日楽しく仕事をしています。長いと感じていた 5 ヶ月もあっという間に 3 ヶ月すぎ、あと 2 ヶ月になったので 1 日 1 日を大切に過ごしたいと思います。

－NZ で感じる異文化

私は今 Queenstown にある語学学校の flat に住んでいて、ブラジル人・フランス人・ニューカレドニア人・タイ人・チリ人・韓国人・日本人のフラットメイト計 14 人で暮らしています。みんな違う国から来ているので生活のスタイルも食事も違うので毎日が新鮮です。また学生の寮なので金曜日と土曜日の夜はよくパーティーをしていて、それぞれの国の料理を食べることもでき、一緒に住んでいる人以外の人とも仲良くなれます。お互いの文化や言葉を教えあったりしていくなかで英語でコミュニケーションをとっているのが楽しいです。

－将来やりたいこと

私は将来児童英語教師になって自宅で子供達に英語を教えたいと思っています。そのために帰国後も英語や子供達に対する英語の教え方について学びたいと思います。今経験しているホテルの仕事とは違いますがここでの経験は絶対にプラスになると思います。就職前に自分の働いたお金で生活してみて、日本にいたときよりも将来のことをより考えられるようになりました。

（Sさん）

－語学学校に通っていたとき学んだ事など

まずこっちに来てから、私より年下の人と会うことが少ない。20 代後半が多いと感じた。wellington では 2 ヶ月目に homestay で悩んだ。日本の感覚であれこれしてもらえると期待しないように前々から心構えしていた

つもりだったが想像をはるかに超えるほど冷めてる態度をとられることもある。wellington 最終日にエアポートまで送ってもらえないかお願いをしたことがあった。そのとき言われたことが、学校から見送り代をもらってないから無理だと言われた。日本人の感覚だったら普通2ヶ月も一緒に生活をしたら最後くらいお見送りするはずだ。だからホストマザーのその言動に正直傷ついたが反対に日本人はやっぱり優しいんだなということを再確認できた。学校では人生初のヨーロッパの友達ができたりと楽しかった。みんな英語の発音も様々でお互いに習ってきた単語も全く違ったりして先生から習う以外にもいろんな知識を増やすことができた。日本で習ってきた英語は確かに正しいけど話すときに使う英語はもっとカジュアルな表現が多く、ナチュラルな文章で話せるようにできるだけたくさん毎日話した。

－インターンシップ

インディアンとラテン系の人と触れ合うことが多くなった。まずパーティーは真夜中に始まる。だから日本人には正直辛い。仕事中はなかなか話す時間はないけれど、朝からこの人とこのことを話そう…と目標を立てたりもしていた。だんだんみんなとコミュニケーションもスラスラ取れるようになり、楽しくなっていくのを感じることができた。一度だけスーパーバイザーに、自分が不満に思っていたことを話したことがあった。初めて本気で英語で自分の気持ち伝えられて自分でも成長できたと感じた瞬間だった。日本人は自分の気持ちを人に伝えるのが苦手だから気づいてもらえるまで待っているけれど、それが一番コミュニケーションを取るときに邪魔しているとNZにきて気づいた。言っていること悪いことあるけれど、ある程度みんな意見は言っているし日本人もっとバシバシいっていいと思った。またスーパーバイザーが言っていたのだが、日本人のイメージは「働き者で疲れない」らしい。

－違いなど

NZの人はジョークがきつい。でも悪気があるってわけではない。そして日本人と違うところは、一人一人が何かしら夢を持っていること。たとえば、ボートに乗るとか、でっかい家を買うなど…ただお金を稼ぐだけじゃなくて大きな夢を持っていきっているNZ人は日本人のお手本かもしれないと思った。

－これから

ハウスキーピングを主にやってみて、職場の環境も良くて問題は何もない。しかし個人的には自分には向いてないということに気づいた。自分はもっと人と話したり英語を使って接客もやりたいと感じた。今回エージェントを通して留学したが、次回は自分で仕事を見つれたり、家も何もかも自分で挑戦してみたいと思った。今の自分なら何か違うことができるかも…と思えるまで自信をつけることができた。もっといろんな世界を見てみたいと今は思っている。

(Kさん)

－語学学校に行って感じたこと、学んだこと、気づいたこと、良かったこと、その他

世界各地から生徒が来ているのでいろんな国の友達ができる。数えてみると自分は22カ国できた。

いろんな友達ができることで価値観が少し変わる。世界の文化を知れる。他の国と日本を比較できる。英語は英語で学ぶ方が理解しやすいし、覚えやすい。すぐ使える。年齢を問わず、いろんな世代の人と話せる。自分の意見を述べる機会がたくさんある。自分の英語のレベルがわかる。日本で学んだことのない単語がたくさん出てくる。たくさんアクティビティーに参加できる。情報がたくさん集まる。みんなそれぞれはっきりとした目標のために勉強していた。

英語そのもののためというより、英語を使って何かを学んでいる人が多かった。いろんなことにチャレンジできる（アクティビティーを通してだったり、じゅぎょうのなかでだったり）。先生がものすごく親身で親しみやすい。学んだことは主に文法、単語。午後はスピーキングの授業で毎回出題されるトピックについて話し

合う。しっかり自分の意見を発言しないともったいない。間違いをその都度その場で訂正してくれる。ニュージーランドの文化（歴史、自然、マオリ、キウイスラング、習慣）もいろいろ習った。とにかく英語をたくさん使える貴重な場所。日本人といるのもいいけど、せっかくだから違う国のこと一緒にいて英語を使うべき。学校内では日本語は禁止。進んでアクティビティー（コーヒークラブ、映画鑑賞、spelling、会話、発音パブナイト）には参加すべき。日本人というだけでみんな興味を持って話しかけてきてくれる。みんな英語で交流をしたいから来ている生徒達ばかりなのでみんな社交的。たしかに働きながらも勉強はできるが、語学学校ほど英語を学ぶのに適した環境はない。

－インターンシップ

英語を話さざるを得ない環境なので必然的に話せるようになる。他の国の仕事に対する考え方の違いに気づく。ラテンアメリカは基本的に楽観的で悪く言うと不真面目、インド人は何でも効率的にしようとする、フィリピンは態度、人使いが荒い。はっきり言って他のいろんな国の人たちと一緒に働くということはすごく大変。休憩になると仕事を中断して時間ぴったりに行き、最後の1分までしっかり休む。日本人としてはキリのいいところまで終わらせてから行きたいと思うことがあるが、逆に怒られる。価値観がその国によって全く違う。部屋を見ただけでどこの国の人が使ったかがわかってくる。中国人の使った部屋はいつも散らかっていてバスルームも水浸しだし、すごく大変。アルバイトとはまた違うので仕事により責任感を感じる。お客さんに英語で質問をされることがよくある。自分ができないことは、はっきりと出来ないと言わないとわかってもらえない。ハウスキーピングは肉体的に結構重労働な仕事。

慣れると仕事が早くなり楽しいと感じるようになる。毎日軽食と昼食が提供されるのですごく助かる。日本人で良かったとひしひしと感じる。日本人として誇りが持てる。遅刻はしないし、任された仕事は責任を持ってやる、自分で考えて行動できる、早くと急かされてもお客様のことを考えると絶対に適当な仕事はできないのできちんと部屋を作る。ホテルが提供してくれる食事はタダにも関わらずみんなクレームを言ったり一口食べて捨てたりしているのを見ていると食べ物やシェフへの感謝の気持ちがないのかなと悲しくなる。基本的に日本人は仕事が早い。日本のような上下関係がありません。

－ニュージーランドの異文化で感じる事、これからしたいこと

とにかく自然豊か。再生可能なエネルギー、自然エネルギーしか使っていない。酸性雨がない。夏がすごく短い。日差しが7倍。サンドフライという蚊よりもやっかいなやつがいる。日本食は結構浸透している。日本人に親切。日本のことについて自分がいかに無知であるかがわかった。日本についてもっと知りたくなる。日本のエネルギー産業はニュージーランドを見習うべき。ニュージーランド人は表面上はすごくいいが、意外とあっさりしている。人を皮肉るのが好き。なまりがすごい。特に南の地方。太っている人の割合が半端じゃない。多国籍。先住民のマオリの文化も大切にしている。空気が読めるという素晴らしい能力は日本人にしかないようだ。道路でも草むらでも裸足で歩いている人がたくさんいる。しゃべるのがめちゃくちゃ早く、それがかっこいいと思っているらしい。日本よりワインが安くて、質がいい。買い物は基本的にエフトポスというカード、現金は持ち歩かない。ビールなどは割高だが日本のものより飲みやすくてはまってしまう。キノコはマッシュルームの1種類しかない。物価がなんでも高い（約2～3倍）。ボート所有者が多い。いろんな種類の鳥がたくさんいる（街中にもどこにでも）。道路によく小動物がしかれている。歴史が浅い。薄切り肉はなく分厚い肉しか売っていない。パイ、フィッシュアンドチップスがみんな大好き。日本ほどいい国はないと心底思う。どれほどの力がついたかTOEICを受けてみたい。英検準一級の取得。日本についてもっと勉強する。日本各地を旅する。日本に生まれて本当に良かったと思う。日本食が一番。コンビニがコンビニと呼べるほどのものじゃない。（日本のコンビニは本当に素晴らしい）。自然を生かしたアクティビティーは多いが、日本人としてカラオケやゲームセンターなどの娯楽施設が恋しくなる。アイスの消費量ナンバーワン。味覚が変わる。ホームシックは常を感じる。親にもこの国を見せてあげたいと思う。羊はすこし郊外に行くだけでたくさんいる（牛もアルパカも

ヤギも)。チョコレートがすごく美味しい。必ず太る。商品がキロ数で売ってある。水道水がピュアでほんとにおいしい。テアナウははっきり言って何にもありません笑。とにかく日本にいるときには気づけない小さなことにも気づける。日本に帰ってやりたいことリストがたくさんありすぎる。お金はテアナウのような田舎に住めば貯まるがクイーンズタウンとかだと楽しみがありすぎて貯まりにくいと思う。100パーセント後輩にお勧めするかと言われるとはっきりはいとは言えない。他の国にも行ってみたいという意味がでてる。

5. 今後の課題と展開について

学生のレポートで見られるように、「語学学校」、特に「インターンシップ」の経験を通して、グローバル社会で生きて行くために必要となる多くの要素を学んだように思える。特に、日本人の文化とは、全く異なる文化背景を持つ国出身者と協働する難しさ、そして共に働くためのコツなども学ぶことができています。明らかに、留学することで英語力の向上ばかりでなく、これからの国際社会で活躍するための異文化理解を含めた、グローバルな感覚を身につけることができているものと思う。

グローバルな人材とはどのような人を指すのかを考える場合、ただ単に上手に英語を話せる人材というだけではなく、「企業・大学はグローバル人材をどう育てるか」（本名信行他編）でも述べられているが「グローバルな活動において、英語が国際協働言語として大切であることはもちろんだが、いわゆる英語力が高ければコミュニケーション力が高いというわけではない。グローバルに活躍する人材には多様な交流相手の多様な文化を理解する能力が重要である。日本人のコミュニケーションの特徴の一つ‘察し’の文化を再考し、国際協働コミュニケーションで活躍できる、グローバル人材の養成を考える必要がある」という観点が重要になる。

さらに、ベルリッツ・ジャパンが「カルチュラル・コンピテンス（「文化」の違いを活用する力）」という言葉で提唱している、文化を生かして積極的に活用するための具体的なスキルを身につける必要があるのではないだろうか。異文化で働くために必要な、具体的な5つの要素として、「オープン・マインド」「自己認識」「他者への認識」「カルチュラル・ナレッジ」「カルチュラル・スキル」をあげている。

このようなグローバル人材育成に必要な要素を考慮に入れながら、これからさらに国際コミュニケーション学科では、カリキュラム改革を実施したい。また、期間の長短に関わらず、多様な留学を奨励し、留学の準備から帰国後の事後指導を含めて総合的に学生のグローバルマインド育成に努め、また同時にそれを検証し、よりよい教育システムを構築していきたい。

参考文献

- 牟田美信（2014）国際コミュニケーション学科でのグローバル人材要請教育の試み、長崎短期大学研究紀要、26, 1-6
- 牟田美信（2015）短大におけるグローバルマインド育成、長崎短期大学研究紀要、27、107-113
- 中島峯雄（2012）『企業・大学はグローバル人材をどう育てるか』アスク出版
- ベルリッツ・ジャパン（2013）『グローバル人材の新しい教科書』日本経済新聞出版社